

2018–2019 年に千葉県館山湾からドレッジにより 採集された貝類

照屋清之介^{1)*}・寺本沙也加²⁾・宮崎息吹³⁾・吉田隆太⁴⁾・黒住耐二⁵⁾

¹⁾千葉県立中央博物館

〒 260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

²⁾岩手県水産技術センター

〒 026-0001 岩手県釜石市大字平田第 3 地割 75-3

³⁾京都大学農学部

〒 606-8502 京都府京都市左京区北白川追分町

⁴⁾お茶の水女子大学 湾岸生物教育研究所

〒 294-0301 館山市香 11 番地

⁵⁾ウルマ自然史研究所

〒 260-0844 千葉市中央区千葉寺町 705-21

*E-mail: s_teruya@chiba-muse.or.jp

(2025 年 1 月 7 日投稿; 2 月 5 日改訂; 2 月 12 日受理)

要 旨 館山湾の水深 2.9–79.2 m の海域で実施されたドレッジにより採集された貝類 34 科 60 種を報告した。千葉県初記録及び分布北限記録更新の種として 5 種 (ヒメフロガイ, ナガイトカケ属の一種 *Amaea laidlawi*, キナフレイシダマシ, オウナタケ, ヘソアキホソオリイレボラ) を報告した。

キーワード: 貝類, 千葉県, 館山湾, ドレッジ

館山湾は、房総半島南部に位置し、湾口が相模灘に面した房総半島のうち最も奥行きのある湾である (小池, 2000)。館山湾の軟体動物相については、1920 年代から調査が実施され (藤田, 1929a, b), これまで多くの報告がなされており (例えば土田・黒住, 1996 など), その研究史については清水 (2001) や立川・黒住 (2021) によって紹介されている。館山市に所在するお茶の水女子大学湾岸生物教育研究所は、1970 年に理学部附属臨海実験所として開所して以降、海洋生物の研究・教育が 50 年以上にわたって継続して行われており、研究所付近の貝類相についても、渡辺 (1973) や立川・黒住 (2021) によって報告されている。本報告では、お茶の水女子大学湾岸生物教育研究所所属の調査船 2 隻によって得られたサンプルを研究対象とし、館山湾沿岸の貝類相について採集日や採集環境 (場所, 水深等) の正確な記録を伴う追加報告を行うことを目的とした。

材料と方法

本研究では、お茶の水女子大学湾岸生物教育研究所が

2018 年 3 月 12 日から 2019 年 4 月 26 日にかけて、館山湾沿岸の水深 2.9–79.2 m の海域で実施した 19 回のドレッジ調査 (調査船: 保坂丸またはシースター) で得られた生貝を材料とした。調査地点の緯度経度、水深などの詳細な情報は、表 1 に示した。採集された標本は、70% エタノールで固定した後、99% エタノールに置換えて千葉県立中央博物館軟体動物資料 (CBM-ZM) として登録した。なお、一部の標本については、殻を乾燥させ、軟体部を液浸状態で保存した。種ごとに採集日とステーション番号が同一の標本は、複数個体をまとめて 1 点として登録した。分類体系や和名は基本的には奥谷 (2017) を参考にし、黒住・大作 (2021) も補助的に用い、学名等については適宜 WoRMS (World Register of Marine Species, <http://www.marinespecies.org>, 2024 年 12 月 1 日閲覧) を参照した。

結果と考察

本調査の結果、2018 年から 2019 年の館山湾のドレッジ調査により 34 科 60 種の貝類 (生貝) が確認された (表

表 1. ドレッジ調査地点のデータ。

緯度経度と水深の " " で囲まれた情報は、実習等の事情により正確なデータが得られていない地点である。

ステーション番号	船名	日付	投入		引き揚げ		調査水深 (m)
			緯度経度等	水深(m)	緯度経度等	水深(m)	
St. 20180312 H1	保坂丸	2018/3/12	34°59'55.4"N, 139°47'44.0"E	79.2	34°59'48.2"N, 139°47'46.6"E	72.7	72.7–79.2
St. 20180312 H2	保坂丸	2018/3/12	34°59'41.3"N, 139°48'17.2"E	44.7	34°59'34.8"N, 139°48'19.1"E	30.2	30.2–44.7
St. 20180312 H3	保坂丸	2018/3/12	34°59'29.7"N, 139°48'41.9"E	36.0	34°59'29.2"N, 139°48'33.8"E	26.6	26.6–36.0
St. 20180410 S1	シースター	2018/4/10	"館山市浜田沖"	"15.0"	"館山市浜田沖"	"15.0"	15.0
St. 20180621 S1	シースター	2018/6/21	34°59'05.9"N, 139°48'31.7"E	"5.0–7.0"	34°59'00.5"N, 139°48'35.2"E	"5.0–7.0"	5.0–7.0
St. 20180621 S2	シースター	2018/6/21	34°59'00.5"N, 139°48'34.6"E	"5.0–7.0"	34°58'58.2"N, 139°49'02.5"E	"5.0–7.0"	5.0–7.0
St. 20180817 S1	シースター	2018/8/17	"館山市香沖"	"5.0–7.0"	"館山市香沖"	"5.0–7.0"	5.0–7.0
St. 20180904 S1	シースター	2018/9/4	"館山市香沖"	"10.0"	"館山市香沖"	"10.0"	10.0
St. 20181120 S1	シースター	2018/11/20	34°59'47.5"N, 139°48'38.9"E	31.2	34°59'31.0"N, 139°48'36.4"E	24.9	24.9–31.2
St. 20181120 S2	シースター	2018/11/20	34°59'46.6"N, 139°48'41.9"E	30.9	34°59'31.7"N, 139°48'36.3"E	25.4	25.4–30.9
St. 20181120 S3	シースター	2018/11/20	34°59'26.2"N, 139°48'36.1"E	21.8	34°59'07.7"N, 139°48'43.8"E	16.9	16.9–21.8
St. 20181120 S4	シースター	2018/11/20	34°59'03.2"N, 139°48'53.1"E	13.1	34°58'58.5"N, 139°48'53.4"E	12.0	12.0–13.1
St. 20190312 S2	シースター	2019/3/12	34°59'11.8"N, 139°47'48.4"E	23.6	34°59'16.0"N, 139°48'00.8"E	20.9	20.9–23.6
St. 20190312 S3	シースター	2019/3/12	34°59'02.8"N, 139°47'50.7"E	16.0	34°59'10.2"N, 139°48'06.7"E	14.5	14.5–16
St. 20190312 S4	シースター	2019/3/12	34°59'00.1"N, 139°47'48.7"E	15.4	34°59'06.4"N, 139°48'07.1"E	12.5	12.5–15.4
St. 20190322 H1	保坂丸	2019/3/22	34°59'36.4"N, 139°48'25.7"E	30.6	34°59'22.8"N, 139°48'32.3"E	23.6	23.6–30.6
St. 20190404 S5	シースター	2019/4/4	34°59'12.4"N, 139°48'01.9"E	16.3	34°59'09.7"N, 139°48'06.6"E	13.7	13.7–16.3
St. 20190426 S3	シースター	2019/4/26	34°59'00.8"N, 139°49'07.0"E	7.3	34°58'45.7"N, 139°49'06.5"E	2.9	2.9–7.3
St. 20190426 S2	シースター	2019/4/26	34°58'57.7"N, 139°49'01.3"E	7.3	34°58'48.9"N, 139°49'04.5"E	5.4	5.4–7.3

2). そのうち、千葉県から初記録と考えられる種が 5 種 (ヒメフロガイ、ナガイトカケ属の一種 *Amaea laidlawi*, キナフレイシダマシ、オウナタケ、ヘソアキホソオリイレボラ) が確認された。環境省レッドリスト 2020 (環境省, 2020) に掲載されている種は準絶滅危惧 (NT) 1 種が確認され、千葉県レッドリスト動物編 (千葉県, 2019) に掲載されている種は 3 種 (最重要保護生物 (A) 1 種, 重要保護生物 (B) 2 種) が確認された (表 3)。以下では、本調査で得られた興味深い種について、詳細を記す。

ヒメフロガイ *Naticarius excellens* Azuma, 1961 (図 1A)

2018 年 11 月 20 日に水深 25.4–30.9 m から 1 個体を得られた。フロガイダマシ *N. concinnus* (Dunker, 1860) に似るが、殻がより薄質で、体層下部の褐色点斑列が弱く不明瞭、臍盤の発達はやや弱いこと、体層の肩部はフロガイダマシよりも撫肩となることから本種は識別できる。ヒメフロガイは、遠州灘から九州西岸に生息するとされ (齋藤, 2017), 清水 (2001) にも千葉県産として挙げられていないことから、千葉県初記録となる。

なお、類似種フロガイダマシは、今回の調査では得られなかった。フロガイダマシは、環境省レッドリスト 2020 (環境省, 2020) では絶滅危惧 II 類 (VU), 千葉県レッドリスト動物編 (千葉県, 2019) では要保護生物 (C) に選定されている。照屋は、2008 年から 2010 年にかけて館山市坂田付近の水深 10 m までの砂底域で素潜りによる潜水調査を行い、本種が毎回の調査で見られるほど普通に生息することを確認していた。一方、照屋と寺本による 2019 年の同海域におけるスクーバ潜水による調査では、本種の生貝を確認できなかった。近年、本県において生息数の減少が推測されることから生息状況

の調査が必要である。

ナガイトカケ属の一種 *Amaea laidlawi* (Melvill & Standen, 1903) (図 1B)

2019 年 4 月 26 日に水深 2.9–7.3 m から 1 個体を得られた。殻は薄質で、縦肋は弱く、縦肋間には微弱な螺条がある。キヌイトカケ *A. immaculatum* (Sowerby II, 1844) に似るが、殻はより薄質で、不規則な縦張肋が現れないことから識別できる。今回キヌイトカケ類似種とした種は、日本周辺からの記録が限られており、分布は和歌山県白浜沖からのみ知られている (Nakayama, 2003)。清水 (2001) にも千葉県産として挙げられていないことから、千葉県初記録となる。

チャイロクレハガイ類似種 *Epitonium cf. imperiale* (Sowerby II, 1844) (図 1C)

2018 年 3 月 12 日に水深 72.7–79.2 m から 1 個体を得られた。土田・長谷川 (2017) に図示・解説されているチャイロクレハガイの形態的特徴と類似するが、本個体は、縦肋の間隔がより密になるため類似種とした。本種やその類似種には、和名だけでもウスムラサキクレハガイやヨコヤマセキモリ、カスミセキモリ等、種小名も *tenuiliratum*, *castanea* 等、多くの名が与えられており、今後の再整理が必要なグループである。千葉県からは、チャイロクレハガイ *E. imperiale* (Sowerby II, 1844), ウスムラサキクレハガイ *E. tenuilirata* (Sowerby II, 1874) の分布が報告されている (清水, 2001)。

ヒメヨウラク (深所型) *Ergalatax* sp. (図 1D)

2018 年 3 月 12 日に水深 72.7–79.2 m から 1 個体、2018 年 11 月 20 日に水深 25.4–30.9 m から 1 個体の合計

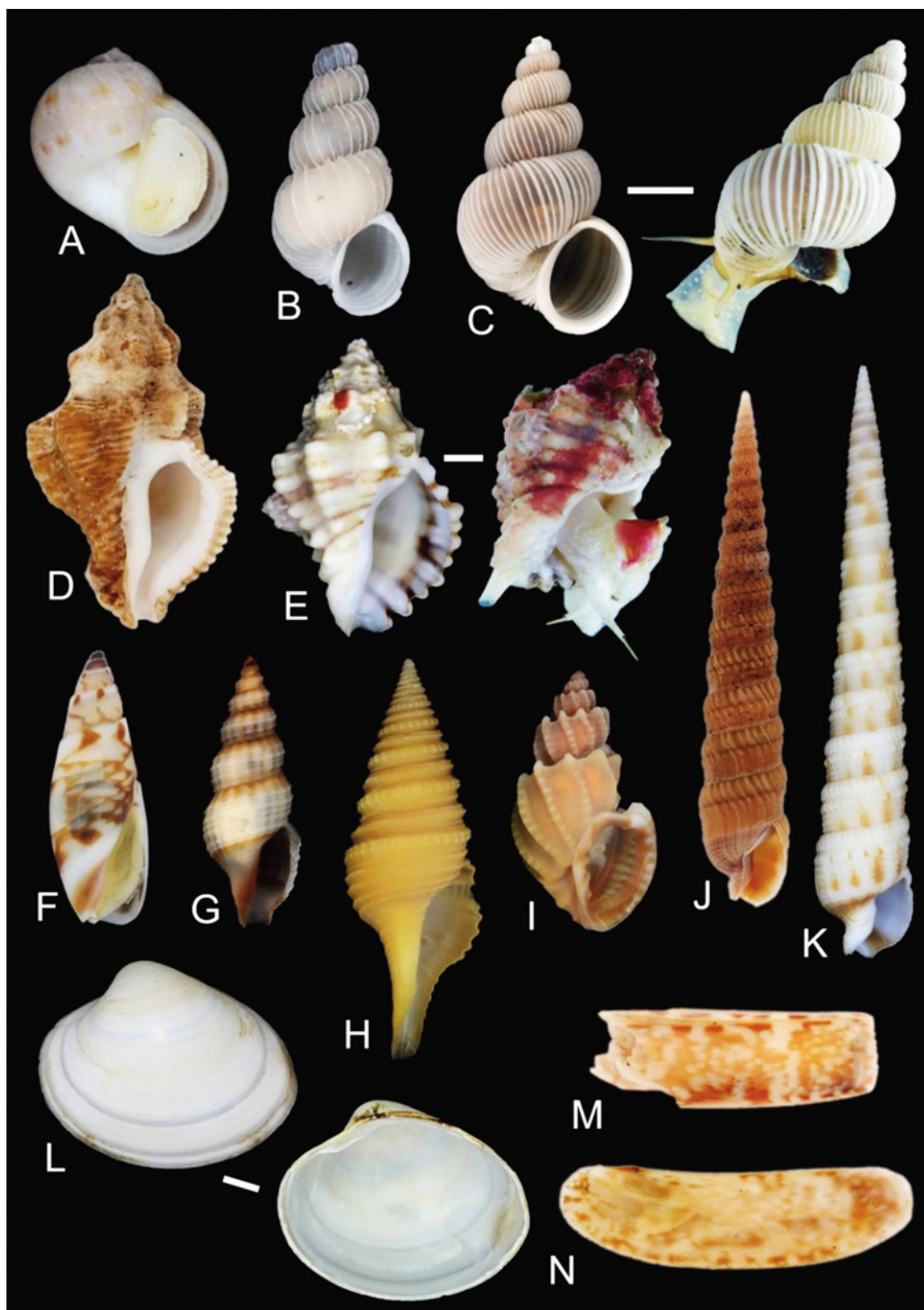


図 1. A: ヒメフロガイ *Naticarius excellens*, CBM-ZM 204509, SL 7.0 mm. B: ナガイトカケ属の一種 *Amaea laidlawi*, CBM-ZM 204510, SL 6.8 mm. C: チャイロクレハガイ類似種 *Epitonium* cf. *imperiale*, CBM-ZM 204511, SL 9.1 mm. D: ヒメヨウラク (深所型) *Ergalatax* sp., CBM-ZM 204523, SL 24.4 mm. E: キナフレイシダマシ *Pascula ochrostoma*, CBM-ZM 204522, SL 13.6 mm. F: ホタルガイ属の一種 *Olivella* sp., CBM-ZM 204527, SL 9.4 mm. G: アミコシボソクチキレツブ *Etrema texta*, CBM-ZM 204532, SL 7.5 mm. H: ジュズカケクダマキ属の一種 *Gemmula* sp., CBM-ZM 204535, SL 25.5 mm. I: ヘソアキホソオリイレボラ *Trigonaphera stenomphala*, CBM-ZM 204543, SL 12.3 mm. J: オウナタケ *Terebra anilis*, CBM-ZM 204538, SL 33.6 mm. K: シロコニクタク属の一種 *Cinguloterebra* sp., CBM-ZM 204540, SL 60.4 mm. L: シロウスハマグリ *Aphrodora noguchii*, CBM-ZM 204567, SL 22.1 mm, SW 13.9 mm. M: パラフマテ *Solen roseomaculatus*, CBM-ZM 204572, SL 17.6 mm. N: タカノハガイ *Ensiculus cultellus*, CBM-ZM 204573, SL 18.7 mm.

表 2. 本調査で確認した貝類のリスト.

科	和名	学名	CBM-ZM	個体数	採集日	St.番号	水深(m)
ニシキウズ科 Trochidae	キサゴ	<i>Umbonium costatum</i> (Kiener, 1839)	204501	3	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	キヌシタダミ	<i>Sericominolia stearnsii</i> (Pilsbry, 1895)	204502	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
	ヒナシタダミ	<i>Conotalopia ornata</i> (Sowerby III, 1903)	204503	2	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
オニノツノガイ科 Cerithiidae	カニモリガイ	<i>Rhinoclavis kochi</i> (Philippi, 1848)	204504	4	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
キリガイダマシ科 Turritellidae	ヒメキリガイダマシ	<i>Haustator cingulifera</i> (Sowerby I, 1825)	204505	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	ヒメキリガイダマシ	<i>Haustator cingulifera</i> (Sowerby I, 1825)	204506	1	2018/3/12	St. 20180312 H2	30.2-44.7
トンボガイ科 Seraphidae	ウストンボ	<i>Terebellum terebellum</i> Kuroda & Kawamoto, 1956	204507	1	2018/9/4	St. 20180904 S1	10.0
タマガイ科 Naticidae	ハギノツユ	<i>Notocochlis cernica</i> (Jousseaume, 1874)	204508	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	ヒメフロガイ	<i>Naticarius excellens</i> Azuma, 1961	204509	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
イトカケガイ科 Epitoniidae	ナガイトカケ属の一種	<i>Amaea laidlawi</i> (Melvil & Standen, 1903)	204510	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	チャイロクレハガイ類似種	<i>Epitonium cf. imperiale</i> (Sowerby II, 1844)	204511	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
フトコロガイ科 Columbellidae	ムギガイ	<i>Mitrella bicornis</i> (Gould, 1860)	204512	2	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
	シラゲガイ	<i>Mitrella lischkei</i> (Smith, 1879)	204513	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	シラゲガイ	<i>Mitrella lischkei</i> (Smith, 1879)	204514	2	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
ムシロガイ科 Nassariidae	アラレガイ	<i>Niotha verrucosa</i> (Adams, 1852)	204515	1	2018/6/21	St. 20180621 S1	5.0-7.0
	アラレガイ	<i>Niotha verrucosa</i> (Adams, 1852)	204516	1	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	トクサバイ	<i>Phos senticosus</i> (Linnaeus, 1758)	204517	1	2018/8/17	St. 20180817 S1	5.0-7.0
イトマキボラ科 Fasciariidae	ナガサキニシキニナ	<i>Turritatirus nagasakiensis</i> (Smith, 1880)	204518	1	2019/3/12	St. 20190312 S2	20.9-23.6
	ナガニシ	<i>Fusinus perplexus</i> (Adams, 1864)	204519	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
アッキガイ科 Muricidae	シマアザミツブリ	<i>Murexsul zonatus</i> Hayashi & Habe, 1965	204520	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	パイブヨウラク	<i>Monstropyphis montfortii</i> (Adams, 1863)	204521	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	キナフレイシダマシ	<i>Pascula ochrostoma</i> (Blainville, 1832)	204522	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
	ヒメヨウラク (深所型)	<i>Ergalatax</i> sp.	204523	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
フデガイ科 Mitridae	ヒメヨウラク (深所型)	<i>Ergalatax</i> sp.	204524	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
	ベニフデ	<i>Mitra rosacea</i> Reeve, 1845	204525	1	2018/8/17	St. 20180817 S1	5.0-7.0
	ベニフデ	<i>Mitra rosacea</i> Reeve, 1845	204526	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
マクラガイ科 Olividae	ホタルガイ属の一種	<i>Olivella</i> sp.	204527	7	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
イモガイ科 Conidae	ハルシャガイ	<i>Conus tessulatus</i> Born, 1778	204528	1	2018/4/10	St. 20180410 S1	15.0
	ハルシャガイ	<i>Conus tessulatus</i> Born, 1778	204529	3	2019/3/12	St. 20190312 S3	14.5-16
ワタソコダマキ科 Borsoniidae	マキモノシャジク	<i>Tomopleura nivea</i> (Philippi, 1851)	204530	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
ヌノメシャジク科 Clathrellidae	ホソシャジク	<i>Pseudoetrema fortillrata</i> (Smith, 1879)	204531	1	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	アミコシボソクチキレツブ	<i>Etrema texta</i> (Dunker, 1860)	204532	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	スソチャマンジ	<i>Guraleus deshayesii</i> (Dunker, 1860)	204533	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	ミガキモミジボラ	<i>Inquisitor vulpionis</i> Kuroda & Oyama, 1971	204534	1	2018/6/21	St. 20180621 S2	5.0-7.0
クダマキガイ科 Turridae	ジュズカケクダマキ属の一種	<i>Gemmula</i> sp.	204535	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
	チビシャジク	<i>Haedropleura pygmaea</i> (Dunker, 1860)	204536	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
タケノコガイ科 Terebridae	シュマダラギリ	<i>Myurella nebulosa</i> (Sowerby I, 1825)	204537	1	2018/4/10	St. 20180410 S1	15.0
	オウナタケ	<i>Terebra anilis</i> (Röding, 1798)	204538	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	オウナタケ	<i>Terebra anilis</i> (Röding, 1798)	204539	1	2018/8/17	St. 20180817 S1	5.0-7.0
	シロコニクタケ属の一種	<i>Cinguloterebra</i> sp.	204540	1	2018/3/12	St. 20180312 H2	30.2-44.7
	トクサガイ	<i>Punctoterebra japonicum</i> (Smith, 1873)	204541	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	キリガイ	<i>Triplostephanus triseriatus</i> (Gray, 1834)	204542	1	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	コロモガイ科 Cancellariidae	<i>Trigonaphera stenomphala</i> Habe, 1961	204543	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
クルマガイ科 Architectonicidae	チヂミナワメグルマ	<i>Granosolarium asperum</i> (Hinds, 1844)	204544	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	チャイロナワメグルマ	<i>Heliacus</i> sp.	204545	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
	オオシイノミガイ科 Acteonidae	<i>Pupa strigosa</i> (Gould, 1859)	204546	1	2018/6/21	St. 20180621 S2	5.0-7.0
シラスナガイ科 Limopsidae	コシイノミガイ	<i>Pupa strigosa</i> (Gould, 1859)	204547	1	2019/4/26	St. 20190426 S2	5.4-7.3
	コシイノミガイ	<i>Pupa strigosa</i> (Gould, 1859)	204548	18	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	ナミジフシラスナガイ	<i>Limopsis crenata</i> Adams, 1863	204549	3	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	イガイ科 Mytilidae	<i>Modiolus</i> sp.	204550	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
ミノガイ科 Limidae	ツグミノマクラ	<i>Modiolatus oyamai</i> (Habe, 1981)	204551	4	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	ウスユキミノ	<i>Limaria hirasei</i> (Pilsbry, 1901)	204552	1	2019/4/4	St. 20190404 S5	13.7-16.3
モシオガイ科 Crassatellidae	モシオガイ	<i>Nipponocrassatella japonica</i> (Dunker, 1882)	204553	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
トマガイ科 Carditidae	フミガイ	<i>Megacardita ferruginosa</i> (Adams & Reeve, 1850)	204554	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	ヒナフミガイ	<i>Pleuromeris pygmaea</i> (Kuroda & Habe, 1951)	204555	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	ヒナフミガイ	<i>Pleuromeris pygmaea</i> (Kuroda & Habe, 1951)	204556	1	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	ミツカドカタビラガイ科 Myochamidae	<i>Myadora fluctuosa</i> Gould, 1861	204557	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
ザルガイ科 Cardiidae	マダラチゴトリガイ	<i>Fulvia undatopicta</i> (Pilsbry, 1904)	204558	1	2018/11/20	St. 20181120 S2	25.4-30.9
マルスダレガイ科 Veneridae	ハナガイ	<i>Placamen lamellatum</i> (Röding, 1798)	204559	1	2018/11/20	St. 20181120 S4	12.0-13.1
	ヒメカノコアサリ	<i>Veremolpa micra</i> (Pilsbry, 1904)	204560	3	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	チリメンカノコアサリ	<i>Timoclea costellifera</i> (Adams & Reeve, 1850)	204561	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	アデヤカヒメカノコアサリ	<i>Timoclea mindanensis</i> (Smith, 1885)	204562	1	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	アデヤカヒメカノコアサリ	<i>Timoclea mindanensis</i> (Smith, 1885)	204563	2	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	アデヤカヒメカノコアサリ	<i>Timoclea mindanensis</i> (Smith, 1885)	204564	2	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	オウギカノコアサリ	<i>Timoclea laeviscostata</i> Kuroda, 1960	204565	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	シロウスハマグリ	<i>Aphrodora noguchii</i> (Habe, 1958)	204566	2	2018/3/12	St. 20180312 H1	72.7-79.2
	シロウスハマグリ	<i>Aphrodora noguchii</i> (Habe, 1958)	204567	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	シロウスハマグリ	<i>Aphrodora noguchii</i> (Habe, 1958)	204568	1	2019/3/22	St. 20190322 H1	23.6-30.6
	マツヤマウスレ	<i>Callista chinensis</i> (Holten, 1802)	204569	1	2018/3/12	St. 20180312 H3	26.6-36.0
	マツヤマウスレ	<i>Callista chinensis</i> (Holten, 1802)	204570	1	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	アサジガイ科 Semelidae	<i>Erilia bisculpta</i> Gould, 1861	204571	1	2019/4/26	St. 20190426 S3	2.9-7.3
	マテガイ科 Solenidae	<i>Solen roseomaculatus</i> Pilsbry, 1901	204572	1	2018/11/20	St. 20181120 S1	24.9-31.2
	ナタメガイ科 Pharidae	<i>Ensisculus cultellus</i> (Linnaeus, 1758)	204573	3	2018/11/20	St. 20181120 S3	16.9-21.8
ニオガイ科 Pholadidae	チビニオガイ	<i>Nipponopholas satoi</i> Okamoto & Habe, 1987	204574	3	2019/3/12	St. 20190312 S4	12.5-15.4
	ニオガイモドキ	<i>Zirfaea constricta</i> (Sowerby, 1849)	204575	2	2019/3/12	St. 20190312 S4	12.5-15.4

表3. 本調査で確認された貝類のレッドリスト掲載種.

科	和名	学名	レッドリスト評価	
			環境省(2020)	千葉県(2019)
タケノコガイ科	トクサガイ	<i>Punctoterebra japonicum</i>	準絶滅危惧 (NT)	重要保護生物 (B)
マテガイ科	バラフマテ	<i>Solen roseomaculatus</i>		最重要保護生物 (A)
ナタメガイ科	タカノハガイ	<i>Ensiculus cultellus</i>		重要保護生物 (B)

2 個体が得られた。今回得られた 2 個体は、潮間帯下部～潮下帯の岩礁域・岩礫底で高密度で見られるヒメヨウラク *E. contractus* (Reeve, 1846) (例えば土屋, 2017; 黒住・大作, 2021) と異なり、殻径が大きく、縦肋・螺肋とも明瞭で、通常褐色の斑紋を持たないフトヒメヨウラク *E. calcarius* (Dunker, 1860) とされることもある。

フトヒメヨウラクは、波部 (1961) により、殻が太く、縦肋が少なくという形質からヒメヨウラクとは識別され、“本州中部—九州 (潮間帯下岩礁)” に分布・生息するとされている。なお、波部 (1961) では、殻は淡灰褐色で、褐色斑を有していない個体が図示されている。フトヒメヨウラクの和名は、筆者らの調べた限り、波部 (1961) まで使用されておらず、この標本が和名基準標本である可能性も高い。つまり、和名のフトヒメヨウラクは、この図の貝に当てられることになり、その生息環境も示されている。ただし、その後、黒田ほか (1971) は、フトヒメヨウラクをヒメヨウラクの同種異名とし、土屋 (2017) も「フトヒメヨウラクは深場の砂底にすみ、縦肋が少なく、太短い型に対する異名」と述べ、WoRMS も同種異名としている。ただし、櫻井欽一・大山 桂が同定を担った村岡 (1972) では、ヒメヨウラクとフトヒメヨウラクは別種として掲載されており、種レベルの見解を異にしている。当館の所蔵標本には、千葉県鋸南町保田漁港の定置網のブイ等で得られた縦肋が角張る波部 (1961) の図に一致する個体 (CBM-ZM 142645) や、ダイビングによる採集と思われる静岡県産の濃褐色で縦張肋上の螺肋が顕著である 2 個体 (CBM-ZM 181578)、館山湾のドレッジで得られた今回の図 1D と同様な 2 個体 (CBM-ZM 150489) が登録されている。

現時点では、1) ヒメヨウラクとして殻が細く、褐色の斑紋を有し、主に潮間帯下部から潮下帯の岩礁・岩礫底に多産する型、2) フトヒメヨウラクの和名の殻が太く、角張る縦肋を持つ白色から淡褐色で、主に潮下帯から上部浅海帯の岩礁で見られる型、3) 今回報告の殻が太く、螺肋が顕著な主に下部浅海帯の砂礫底に生息する型 (ヒメヨウラク (深所型)) という 3 つのタイプが存在するのではないかと捉えている。今後、これらの型の間の遺伝的な比較が必要であると考えられる。なお、幼貝では、3 タイプの特徴は明確ではなく、打ち上げ幼貝で、各タイプを識別することはできない。

キナフレイシダマシ *Pascula ochrostoma* (Blainville, 1832) (図 1E)

2018 年 11 月 20 日に水深 25.4–30.9 m から 1 個体得られた。本種は、清水 (2001) や立川・黒住 (2021) に

掲載がなく、土屋 (2017) は伊豆大島以南に分布していることから、正確な生貝の記録として本報告が千葉県初記録、分布北限記録更新となる。

以下では、2008 年から 2019 年にかけての館山湾周辺における本種の分布の確認状況を記す。照屋は、2008 年から 2010 年にかけて館山市坂田 (東京海洋大学館山ステーション) で月 1 回程度の頻度で潜水調査を行っていたが、本種を確認することはできなかった。都築章二氏は、館山市布良で 2013 年 4 月に新鮮な本種 1 個体を打ち上げ貝類調査で得ており、同年および翌 2014 年の同所での複数回の打ち上げ調査で 10 個体以上、2018 年からの沖ノ島周辺での潮下帯の潜水調査でも多数の本種を確認している (都築氏、私信)。照屋と寺本も、2019 年 5 月 17 日に館山市坂田で潜水調査を行い、水深 14.8 m の岩礁地において本種の生貝が多産していることを確認している。このように、キナフレイシダマシは、2013 年以降、房総半島南端部で見られるようになり、現在では密度を高くしていることがわかる。

ホタルガイ属の一種 *Olivella* sp. (図 1F)

2019 年 4 月 26 日に水深 2.9–7.3 m から 7 個体得られた。本種を含むホタルガイ類は、分類学的な混乱が見られ、形態観察を伴う分子系統解析により館山市周辺には 4 種程度分布していることが分かっている (照屋、未発表)。館山市周辺では、水深 10 m 程度までの海域に、ホタルガイ *O. japonica* Pilsbry, 1895、ムシボタル *O. fulgurata* (Adams & Reeve, 1850)、本種の 3 種が生息しており、水深約 50 m 以深にワタゾコボタル *O. spretoides* Yokoyama, 1922 またはその類似種が生息している。これらは、生息水深、プロトコンク (原殻) のサイズ、殻頂及び軸唇下部の着色により、形態的に区別可能な可能性がある。今回得られた個体は、ムシボタルに酷似するが、プロトコンクのサイズが大きく、殻頂が黒褐色に強く染まり、軸唇下部が着色する特徴を持つため、ホタルガイ属の一種とした。

アミコシボソクチキレツブ *Etrema texta* (Dunker, 1860) (図 1G)

2019 年 4 月 26 日に水深 2.9–7.3 m から 1 個体得られた。殻長 7.5 mm で、体層は殻長の 2/5 を占め、その表面に弱い明瞭な結節を持つ螺肋が 5 本あり、縫合下・体層底部・水管部は明褐色に彩色される等の特徴を持つ。

アミコシボソクチキレツブの和名の命名者は、吉良 (1945) によると戦前に広島県の貝類をまとめた瀧巖であり、その和名基準標本を探し出すことは現時点では困

難と思われる。濱村（2004）では同じ広島県産の標本を図示しており、形態の特徴は今回得られた館山の個体と同様であり、この標本に基づいて、本報告ではアミコシボソクチキレツプと同定した。長谷川（2017a）や成ケ島探見の会（2023）においてアミコシボソクチキレツプとして図示された標本とも一致する。寺本ほか（2022）で、和歌山県日高町の砂泥底の水深 1–7 m の範囲で採集し、ヌノメシヤジク属の一種 *Etremopa* sp. として報告・図示した種も本種に該当する。本種はやや外海の淘汰の良い中粒砂程度の海岸に、他の薄質の貝類と共に決して多くはないが、稀でもなく得られることもあり（黒住、観察）、千葉県でも記録されている（清水，2001）。本種の主な生息環境は、潮下帯の砂底や砂泥底と考えられる。

なお、Oyama & Takemura（1959）は、アミコシボソクチキレツプの和名で伊豆半島産の 3 個体を図示（figs. 7–12）しているが、この中に 2 種含まれている可能性がある。figs. 9–12 の 2 個体は、今回の館山の種と同種と思われるが、figs. 7, 8 の個体は細長く、螺層はより高く、螺肋は結節とはならないため、筆者らはアミコシボソクチキレツプとは別種と考えている。この figs. 7, 8 のような細長い種は、濱田（2008）によってもアミコシボソクチキレツプとして大分県深島沖の標本が図示されている。これらの種については、今後、分類学的な整理が必要である。

ジュズカケクダマキ属の一種 *Gemmula* sp. (図 1H)

2018 年 11 月 20 日に水深 25.4–30.9 m から 1 個体を得られた。今回得られた個体は、肩部が角張らず、殻色は全体的に淡褐色に近い濃黄色を呈する。ジュズカケクダマキ *G. kieneri* (Doumet, 1840) に比べて殻底部が膨らまないことから、奥谷ほか（2017）で図示・解説されているコゲジュズカケクダマキ *G. rosario* Shikama & Hayashi in Shikama, 1977 に類似する。今回の個体は、コゲジュズカケクダマキよりも小形（殻長 25 mm）で、体層の強い螺肋の間に細い螺肋を有さず、水管が細くて長いことにより、コゲジュズカケクダマキと識別でき、別種だと判断した。他にも類似する種としてホソジュズカケクダマキ *Gemmula* sp. もあるが、ホソジュズカケクダマキは殻全体が細いこと、褐色の個体も時に存在するが体層上部の太い結節を持つ螺肋が白色になり、その他の螺肋はより細く、水管が短いことなどによって、この種と識別できる。

今回の個体と同種と思われる標本が、中央博物館所蔵の大矢進三コレクション中に含まれている。“ウスチャジュズカケクダマキ 和歌山県”として大矢氏が作成したラベルの入った生貝 2 個体の標本である（CBM-ZM 181096）。このウスチャジュズカケクダマキの和名は、肥後・後藤（1993）に命名者不詳で“紀伊，九州西岸（100–150 m 砂底）”という形で掲載されている。今回の個体も、学名は不詳で、ウスチャジュズカケクダマキとされていた貝の可能性がある。ただし、和名基準標本を探し出すことは困難であり、この和名の貝かどうかを

判断することはできなかった。

オウナタケ *Terebra anilis* (Röding, 1798) (図 1J)

2018 年 8 月 17 日に水深 5.0–7.0 m から 1 個体、2019 年 4 月 26 日に水深 2.9–7.3 m から 1 個体の合計 2 個体を得られた。今回得られた個体の殻は細く、縦肋は弱く湾曲している。縫合は深く、縫合下帯は螺溝で区切られる。縫合下帯とその螺溝で区切られた下部には、不明瞭な小結節螺列をめぐらす。この種は、細い殻形、縫合下の螺列は太く、弱いながら結節状となること、濃褐色の色彩などから、オウナタケに同定した。本種は、清水（2001）に掲載がなく、土田・久保（2017）は紀伊半島以南に分布するとしていることから、正確な生貝の記録として本報告が千葉県初記録、分布北限記録更新となる。

シロコニクタケ属の一種 *Cinguloterebra* sp. (図 1K)

2018 年 3 月 12 日に水深 30.2–44.7 m から 1 個体を得られた。今回得られた個体は、殻長 60.4 mm と大きく、殻表の光沢は強く、色斑は疎である。

シロコニクタケ *C. adamsii* (Smith, 1873) と近縁種のアザラシタケ *C. quadriarata* (Yokoyama, 1922) は、前者は小形で、縫合が階段状になるといった特徴を有するため、識別できるとされている（例えば、土田・久保，2017）。識別形質は示されていないが、Oyama & Takemura（1961）は長崎県平戸産のシロコニクタケと愛知県産のアザラシタケの標本を図示しており、前述の特徴に合致している。この図から指摘されている形質以外にも、シロコニクタケは縫合下螺列の結節や体層の螺肋がやや強く、殻表の光沢が強くなり、色斑はやや強いこと等の特徴を有すると考えられる。

今回得られた個体は、アザラシタケの特徴に類似するものの、縫合下の螺肋とその上の結節はかなり強く、Oyama & Takemura（1961）や土田・久保（2017）の示した形質とは異なる。黒田ほか（1971）の相模湾産貝類においてタケノコガイ科の分類等を分担した大山 桂は、先の Oyama & Takemura（1961）のものとは異なる大形で、光沢が強く、彫刻と色斑の弱い個体をシロコニクタケとして図示し、和名・学名ともアザラシタケには全く触れていない。

これらのことから、現時点では筆者らにはシロコニクタケとアザラシタケを明確に区別することはできなかった。シロコニクタケとアザラシタケは、多様な形態の変異を有する同一種、あるいは複数の隠蔽種を含む種群の可能性もある。

ヘソアキホソオリイレボラ *Trigonaphera stenophala* Habe, 1961 (図 1I)

2018 年 3 月 12 日に水深 26.6–36.0 m から 1 個体を得られた。本種は、清水（2001）や立川・黒住（2021）に掲載されておらず、長谷川（2017b）は伊勢湾から九州北西岸の潮下帯、砂泥底に分布するとしており、正確な生貝の記録として本報告が千葉県初記録、分布北限記録

更新である。

シロウスハマグリ *Aphrodora noguchii* (Habe, 1958) (図 1L)

2018 年 3 月 12 日に水深 72.7–79.2 m から 2 個体、2018 年 3 月 12 日に水深 26.6–36.0 m から 1 個体、2019 年 3 月 22 日に水深 23.6–30.6 m から 1 個体の合計 4 個体が得られた。本種は、ウスハマグリ *A. kurodai* (Matsubara, 2007) に類似するが、殻高が低く、薄質で、3 cm 以上には大成しないことおよび主な生息水深は上部～下部浅海帯であることから識別できる。今回の調査から、館山湾では水深 23.6–79.2 m に生息していることが明らかになった。なお、ウスハマグリは、潮下帯から上部浅海帯に生息し、海岸に打ち上げられることも多いが、シロウスハマグリが打ち上げられることはない。松隈 (2017) では、相模湾から九州の水深 10～100 m に分布するとされているが、清水 (2001) により千葉県鋸南町の保田沖の水深 81 m の砂泥底からも確認されている。

バラフマテ *Solen roseomaculatus* Pilsbry, 1901 (図 1M)

2018 年 11 月 20 日に水深 24.9–31.2 m から 1 個体が得られた。生貝であったが破損していた個体で、殻高が小さく、紅褐色の色斑が密に存在するという特徴から、バラフマテに同定できる。環境省 (2020) では準絶滅危惧 (NT)、千葉県 (2019) では最重要保護生物 (A) に選定されている。県内では、過去に館山湾と小湊から記録されているのみで、現在では殆ど見ることができない種である (黒住, 2011)。近年も、県内において本種の生貝の採集例を筆者らは知り得ず、今回の生貝の生息情報は貴重な記録である。

タカノハガイ *Ensisculus cultellus* (Linnaeus, 1758) (図 1N)

2018 年 11 月 20 日に水深 16.9–21.8 m から 3 個体が得られた。千葉県 (2019) では重要保護生物 (B) に選定されている。照屋は、2008 年から 2016 年にかけて全国的に素潜りによる潮下帯砂底域の貝類について調査を行っており、関東近郊では神奈川県葉山町や千葉県館山市などで低密度に生息していることを確認している。一方、照屋は 2023 年に京都府宮津市の水深 1–5 m の砂泥底を素潜りによる潜水調査をした際に、本種が 1 時間の調査で 20 個体以上見つかるほど、局所的に多産している状況を確認した。本県においても詳細な生息状況の調査を行うことで、本種の生息地保全に有効な情報が得られる可能性がある。

謝辞

本研究で用いた標本は、お茶の水女子大学湾岸生物教育研究所の文部科学省教育関係共同利用拠点の助成を受けて採集された標本である。また、採集にあたって、保坂丸船長の保坂忠氏、並びにお茶の水女子大学湾岸生物教育研究所長清本正人氏、山口守氏、ほか職員皆様にご協力いただきました。

本研究を行うにあたり都築章二氏には貴重な標本を検討させていただき、石井健一郎、石川 裕、知野光雄の各氏には、種同定に関して有益なご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

引用文献

- 千葉県. 2019. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト 動物編 2019 年改訂版. 40pp. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉.
- 藤田 正. 1929a. 館山湾底棲貝類調査 (1). ヴェキナス 1: 58–65.
- 藤田 正. 1929b. 館山湾底棲貝類調査 (2). ヴェキナス 1: 88–97.
- 波部忠重. 1961. 続原色日本貝類図鑑. [iv]+IX+[iii]+182 pp.+app. 46 pp.+66 pls. 保育社, 大阪.
- 濱田 保. 2008. おおいたの貝. 大分県産貝類目録・図譜. 136 pp. 自刊.
- 濱村陽一. 2004. 芸南の貝類図鑑. 222 pp. 蘭島文化振興財団, 広島.
- 長谷川和範. 2017a. ヌノメシャジ科. 所収 奥谷喬司 (編) 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 352–355, 1014–1017. 東海大学出版部, 神奈川.
- 長谷川和範. 2017b. コロモガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 386–389, 1052–1055. 東海大学出版部, 神奈川.
- 肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 22+693+13+1483 pp. エル貝類出版局, 大阪.
- 環境省. 2020. レッドリスト貝類. 所収 環境省自然環境局野生生物課 (編) 環境省第 4 次レッドリスト改訂版. <http://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf>
- 吉良哲明. 1945. 海産日本現生貝類総覧. (9+) 352 pp. 自刊.
- 小池康之. 2000. 第 4 章 館山湾. 所収 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌本編 7 千葉県の動物 2 海の動物, pp. 46–60. 千葉県, 千葉.
- 黒田徳米・波部忠重・大山 桂. 1971. 相模湾産貝類. xvi+3+741+489+51 pp. 丸善, 東京.
- 黒住耐二. 2011. バラフマテ. 所収 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 動物編 2011 年改訂版, p.434. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉.
- 黒住耐二・大作晃一. 2021. くらべてわかる貝殻. 127 pp. 山と溪谷社, 東京.
- 松隈明彦. 2017. マルスダレガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 581–588, 1241–1249. 東海大学出版部, 神奈川.
- 村岡健作. 1972. 貝類標本総合目録. 神奈川県立博物館自然部門 資料目録 (3). 8pls.+VII+1–222. 神奈川県立博物館, 神奈川.
- Nakayama, T. 2003. A review of northwest Pacific epitoniids (Gastropoda: Epitoniidae). 143 pp. Backhuys Publishers, Leiden.
- 成ヶ島探見の会. 2023. 由良湾・成ヶ島の貝類 (2022 改訂版). 4+39 pp.+178 figs.+14 pp. 成ヶ島探見の会, 兵庫.
- 奥谷喬司 (編). 2017. 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. 1375 pp. 東海大学出版部, 神奈川.
- 奥谷喬司・長谷川和範・土田英治. 2017. クダマキガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 374–377,

- 1038–1041. 東海大学出版部, 神奈川.
- Oyama, K. and Y. Takemura. 1959. The Molluscan Shells. Vol. II, *Etremopa*. Resources Exploitation Institute, Tokyo.
- Oyama, K. and Y. Takemura. 1961. The Molluscan Shells. Vol. V, *Stropterabrum*・*Cinguloterbara*. Resources Exploitation Institute, Tokyo.
- 齋藤 寛. 2017. タマガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 189–197, 858–866. 東海大学出版部, 神奈川.
- 清水利厚. 2001. 千葉県の軟体動物相. 千葉水試研報 57: 1–159.
- 立川浩之・黒住耐二. 2021. 千葉県館山湾からドレッジにより採集された興味ある貝類. 千葉中央博研究報告特別号 11: 55–71.
- 寺本沙也加・照屋清之介・池辺進一. 2022. 和歌山県日高町における潮下帯砂底域の貝類相. ちりぼたん 53(1): 19–47.
- 土田英治・長谷川和範. 2017. イトカケガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 179–191, 889–901. 東海大学出版部, 神奈川.
- 土田英治・久保弘文. 2017. タケノコガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 378–384, 1042–1050. 東海大学出版部, 神奈川.
- 土田英治・黒住耐二. 1996. 淡青丸で房総半島南端, 沖ノ山周辺からドレッジにより採集された興味ある貝類. 千葉中央博自然誌研究報告 4: 33–49.
- 土屋光太郎. 2017. アッキガイ科. 所収 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 282–310, 946–972. 東海大学出版部, 神奈川.
- 渡辺洋子. 1973. 館山臨海実験所付近の動物相. 館山臨海実験所研究報告 1: 15–38.

**Some Molluscs Dredged from Tateyama Bay,
Boso Peninsula, during 2018 to 2019.**

Shinnosuke Teruya^{1)*}, Sayaka Teramoto²⁾, Ibuki Miyazaki³⁾, Ryuta Yoshida⁴⁾ and Taiji Kurozumi⁵⁾

¹⁾ Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan

²⁾ Iwate Fisheries Technology Center
3-75-3 Heita, Kamaisi, Iwate 026-0001, Japan

³⁾ Faculty/Graduate School of Agriculture, Kyoto University
Kitashirakawa Oiwake-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8502, Japan

⁴⁾ Marine and Coastal Research Center, Ochanomizu University
11 Kohyatsu, Tateyama, Chiba 294-0301, Japan

⁵⁾ Uruma Natural History Institute
705-21 Chibadera-cho, Chuo-ku, Chiba 260-0844, Japan

Sixty species of molluscs, including Gastropoda and Bivalvia, were collected by dredge surveys from Tateyama Bay, Chiba Prefecture, during 2018 to 2019. These include 5 species newly added to malacological fauna of Chiba Prefecture: *Naticarius excellens* Azuma, 1961, *Amaea laidlawi* (Melville & Standen, 1903), *Pascula ochrostoma* (Blainville, 1832), *Terebra anilis* (Röding, 1798) and *Trigonaphera stenomphala* Habe, 1961.